

ゼミ学生と考える基礎学力の養成

森下 博*

要約

健康福祉短期大学は開学6年目で、子ども福祉学科は開設2年目に当たる。在学2年間で現場に通用する保育士を養成するにはどんな力が必要であるのかが問われている。はっきりしていることは、専門科目の講義や実習に堪えられる基礎学力の養成が不可欠の課題だという点である。しかし、基礎学力とはなにか、短期大学生に何をどのように身につけさせるか、という具体的な問題になると、途端に難しすぎて、手に負えなくなる。

一定の結論を得るには最低でも2、3年は必要である、というのは子ども福祉学科会議での結論である。そのことを前提にして、この4月から半年間、各ゼミにおいて、基礎学力の養成を意識しつつ、指導教員の専門分野と学生の意向や関心に配慮しつつ、取り組むことを確認した。森下ゼミでは、基礎学力を正面に据え、着地点を卒論に置きとりくんだ。そして、9月の中間発表当日に合わせて、とにかく不十分ではあっても論文の形式に整えるようにして仕上げた。したがって、内容的には非常に不十分なことは承知の上で、基礎学力についての先行事例の一つとして、とらえていただければ幸いである。

キーワード： 基礎学力 学習権 知的好奇心 教育改革

2007年9月28日受領（教育研究）

はじめに

基礎学力といえ、読み・書き・算の力であるという点は誰もが異論のないところである。では、短期大学で基礎学力の養成といえ、必ず議論になるのは、基礎学力の内容は、どのような方法で、どの程度つけられればいいのか、が問題になる。

今回、森下ゼミでは、基礎学力養成のためだからといって、次のような一般的によく行われている方法はとらなかった。その方法というのは、小学校の読み・書き・算の学力の程度を調査して、その欠けているところを計画的に習熟練習で補うというものである。短大に夢と希望をもって入学してきた学生に、いきなり、大学のカリキュラムと切り離れた形で、学力を養成するという方法は、とるべきではないと考えたからである。その理由は、学力実態調査から遡っての習熟練習のやり方では、学生の気分感情への配慮に欠け、学習意欲を削ぐだけでなく、基礎学力の養成の効果も薄いと判断したからである。また、後述するが、基礎学力

を矮小化してしまい、養成の方向を誤らせるのではないかと危惧するからである。

では、どのように基礎学力への接近をはかったか。森下ゼミの学生は11名である。この学生一人ひとりに自分のどちらかといえ、苦手だと意識している分野、たとえば「漢字・ひらがな・話す・論文や作文」の中からひとつを選択させ、4つのグループに分けた。半年をかけてその分野について研究をし、9月の中間発表までにまとめるよう話し合った。この段階では、ゼミ生は論文の形式（書き方や原稿枚数）については全く分かっていない状態である。したがって、決ったグループ毎に、まず自分達の分野の問題を探し、自分たちでやってみて、どんな問題が間違ったかをはっきりさせる。次に、なぜ、間違ったのかを調べる。そして、自分たちが習った小学校の時の教科書や先生を思い出しながら原因について考察し、まとめるようにした。グループによって、すすみ具合が一様ではないが、つまずきのルーツをたどるなかで、主体的に原因を調

*大阪健康福祉短期大学
〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8
大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科
e-mail : h.morishita@kenko-fukushi.ac.jp

べるグループもでてきた。その点は予想以上の展開で、手ごたえを感じた。その上、この取り組みをとおして、それぞれの分野で新しい基礎知識を獲得できた学生もいる。こうして論文をつくることを正面にすえた取り組みを通じて、学習への意欲の回復や基礎知識の獲得ができれば言うことはない。

一. 基礎学力をひとり切り離しての議論や実践ではダメ

1. 基礎学力の低下問題、本学だけでない大学共通の現象

基礎学力の低下の問題は単に本学だけの課題ではない。以前に、『分数ができない大学生』（東洋経済新聞社、1999年）『小数ができない大学生』（同、2000年）の本が出て話題になった。第三弾としてだされたのが『理系学生も学力崩壊—算数のできない大学生』（東洋経済新聞社、2001年）である。それによると、前2冊では国立大学の難関校でも学力低下が進んでいることを報告し、今回の「算数のできない大学生」では、理工系学部、大学院、教員養成系の大学生の学力低下も深刻であることを明らかにしたというのである^①。

しかし、ここでとりあげられている基礎学力の低下問題が計算力の低下だけに限定している点で、問題はある。しかし、基礎学力のとらえ方にかかなりの違いはあるにしても、基礎学力の低下問題は本学だけの特殊な問題ではないことは確かである。

2. 短大で必要な基礎学力とは、実習、卒論に通用する力である

基礎学力の養成について、内容や方法、評価などは、まだ議論の段階には至っていない。したがって、学内での議論では、基礎学力の養成では一致してもその内容と方法については、いろんな意見がでることも予想される。

したがって、本稿では、基礎学力や学力一般についてではなく、焦点を絞って展開したい。ここでは後述する本学のゼミ指導の教育目標に焦点をあて、短大生の学習課題に合わせて基礎学力の問題を考えていきたい。したがって、本学でつきたい基礎学力とは「実習・卒論に耐えうる基礎学力」^②である。（本学「学生便覧」参照）しかし、先にも述べたように、短大が、必要とする基礎学力の内容、つまり、実習・卒論に通用する力とはどんな力か、どのような方法で、どの程度つけ

ればいいのかは、これからの問題である。

3. テストではなく、聞き取りで把握する学生の基礎学力の実態

本学の学生は、何を根拠に基礎学力が不足しているといわれているのか。学力不足の根拠は、実習先の指導教員、本校の実習担当教員、卒論（ゼミ）指導教員、その他の学生と関わっている教職員らの情報からである。基礎学力に欠ける実態としてその出された声を列挙すると、①言葉遣いや②実習記録の取り方（「ひらがな」ばかり）。③保護者との対応など一般常識的なことが身につけていない。④何をしに実習に来ているのか、目的意識を持っていない。⑤講義中の私語が多い。⑥専門科目の講義についていけない。⑦そもそも学習意欲があるのだろうか、全ての学生をさしていいにしても、厳しい指摘である。

この他、実態を示す内容を大学の文書から拾うと、⑧「文章を書く力が弱い」、⑨「発言が苦手」、⑩書くことが苦手で、作文や論文への発展に苦勞する。⑪専門用語へのハードルが高い ⑫学習習慣が身につけていない、などである。

また、4月当初のゼミ指導会議では、学生の学力実態の把握に必要な視点として「①読む・書く・計算力 ②表現力—話す・聞く・司会をする ③疑問や課題を意識できる・調べる力 ④資料整理—まとめる力 ⑤知的好奇心の育ち ⑥コミュニケーション能力 ⑦自己肯定観の度合い」などが、挙げられた。

4. 社会性の力を抜きにした「基礎学力」の充実疑問

基礎学力不足の問題を議論すると、必ずといっていいほど、「テストによる学力調査をしては」とか「最低6年生程度、いや4年生程度の力があればいいのではないか」という声が出るものである。しかし、簡単に、学力だけを純粋に切りはなして、議論すると、違った意味で大きな問題にぶつかる。たとえば、昨今の少年事件の報道のなかで、よく聞かれるフレーズに、「まさかあの良い子が…考えられません」というのがある。会見などで述べられている「良い子」とは、勉強もよくでき、おとなしく、目立たない問題のない子である。なぜ、よい子のはずの少年が、凶悪な事件を起こすのか。それは「勉強がよくできる、真面目な子」であるかどうかの問題なのではなく、「社会性（人付き合い）の力」が育っているかどうか問われているからであ

る。つまり、社会性の力をどう育てるかを抜きにした、基礎学力の養成の議論や実践は要注意ということである。

5. 意味の理解が、学力（計算力）定着のカナメ

基礎学力の養成に効果があるとして、ドリルによる繰り返し練習が、今、ブームになっている。確かに、習熟の重要性を認めつつも、繰り返し練習だけを機械的に課すことの問題点も指摘されている。坂元忠芳によると、「計算問題ができないということは、ふつう考えられているように計算操作がうまくできないというだけではありません。計算の学力には何よりも数と計算の意味がわかっているかどうかが決定的です。意味がよくわからないまま、ドリルで練習を繰り返しても計算力が定着していかないのはこのためです。」^③続けて、坂元は、学力づくりに欠かせないものとして「①ものごとに生き生きと働きかける感性、②読み。書き。算と理解と習熟、③生きる力と結びつけ、課題と見通しをもって、ものごとにとりくんでいく力」^④が必要であると強調している。つまり、学力を論じる時に決して忘れてならないことは、読み。書き。算と習熟だけを問題にしてはならないことを指摘している。

6. 読む・書く・算は、分離しての議論・実践ではダメ

読み書き算と習熟だけを問題にしてはならないについては、別の角度から、矢川徳光も同様のことを述べている。彼の著書である『教育とは何か』の中で、読み。書き。算の基礎学力の重要性を認めつつ、基礎学力をひとり切り離しての議論や実践ではダメであると、はっきりと指摘している。彼は「学校教育に何をもとめるのか、なによりもまず、基本的な事実と科学的認識の基本となっているものを正しく教えることである、と行っていいと思います。もっとくだけていえば、基本的な事実や科学的認識の基本を知るといっても、まさにそのことのために先立つものは、読み・書き・算の力です。この方面の力を子どもに身につけさせることは学校教育のいわば礎石であります。」と、読み・書き・算の力の重要性を強調しながら、「基礎学力の充実といっても、基礎学力をひとり切り離しての議論や実践ではダメであるというのが結論である。分かり切ったことのようにあるが、意外にこの点が抜けることがあるので、念をおした。」と、われわれに警告をし

ている^⑤。

7. 基礎学力は、生きる力の基礎であり、権利である

基礎学力をどのようにとらえるか。今回のテーマである「ゼミ生と考える基礎学力」の位置づけは、「実習、卒論に通用する力」である。表現は違うが、「基礎学力は、生きる力の基礎であり、権利である。」という考え方とは大きな違いはないと考える。そのことについて、わたしの考えの根拠の一つになっている考え方を紹介する。

坂元は「基礎学力は生きる力の基礎」の項で、読み書き算のルーツについて、ヨーロッパでは、スリーアールズ(3R's=Reading, writing, arithmetic)」として扱われていたことや日本では、商品生産・流通がさかんになった近世以降で、平安末期から明治初期にかけて、民衆に親しまれてきたこと。また、「往来物」として初歩的な教科書から手紙の書き方、地域の様子や物産などの商品取引や生産に必要な知識を得ていたことなど、読み。書き。算は実用的な意味が強かったことを紹介している^⑥。

しかし、「それだけではない」として、「読み書き算をとおして、①ものごとを認識する基礎的な手段を獲得。②世界を意識的に変革して、人間的に生きるための基礎的な力を身につけると、している。たとえば、「書く」ことについては「『書く』力を身につけるということは現実をコントロールしながら、自由に生きていくことができるようになる。『書く』力は、この意味で、生きる力の基礎なのです。」^⑦としている。

この発想はユネスコ・学習権宣言にも通じる考え方でもある。

ユネスコ・学習権宣言(1985年)によると、学習権とは「読み、書きの権利であり、質問し、分析する権利であり、創造する権利であり、自分自身の世界を読みとり、歴史をつづる権利であり、教育の手だてを得る権利であり、個人および集団の力量を発達させる権利である。…(後略)…」とある。「読み、書き」の権利とは、自分自身の「世界を読みとり」、「歴史をつづる権利」ということになる。

確かに、基礎学力は人間にとって、歴史的には実用的な意味をもっていた時代もあったが、しかし、今日では、ものごとを認識する基礎的な手段、人間的に生きるための基礎的な力としての役割を担っている。つまり、生きる力の基礎であり、権利としてとらえられ

ているのである。ここでも基礎学力を、読み。書き。算の狭い意味でとらえてはいないことがわかる。

二. 基礎学力養成は、短大生にふさわしい課題と結びつけて

1. 基礎学力をどのような方法でつけていくか

ゼミ指導教員会議で基礎学力の養成で留意すべき点は何かが議論された。まとめると、(1)達成感をもてるように。(2)叱るより、励ます方向で。(3)どんな内容も学生の自発性に依拠する。(4)個別学習と個別の援助。(5)知的好奇心につながる学生の関心事・特技・趣味や今ある力から出発する。(6)その他、学生の興味関心を重視する点から、ゼミの特色を生かして取り組むという点も確認された。たとえば、新聞の切りぬき・好きな図書・映像などである。

また、「学生の意欲を喚起する方法」として、出された意見は「①基礎ゼミで、学生の意欲、関心のある内容を取りあげ、後期ゼミから卒業論文につなぐ力へ②それぞれの発表機会を大切に。実習後の発表・ゼミ発表・一年前期ゼミのどこかで発表の機会を確保しては」などであった。

以上の点から考えると、本学教員の基礎学力の養成についての考え方は、基礎学力不足を小学校ドリルに遡って、習熟練習するという方法には基本的には同意ではないということになる。しかし、具体的にどうとりくむかはこれからである。

先に、大学生の低学力の問題を紹介したが、この問題は大学生だけではないらしい。高校生の低学力が問題となり、その克服を学校の課題としているところが珍しくなくなっているようだ。

以下、紹介する2つの高校に共通する教訓は、善意ではじめたことであったが、かつて高校生につまずいた学年に遡って、習熟練習を強制してきたことを総括し、今の高校生にふさわしい課題にとりくむなかで、成果をあげているという貴重な取り組みの経験である。森下ゼミでのとりくみの先行経験として、紙面の許す範囲で、基本的な考え方について紹介する。

2. 高校生に、もとの年齢にもどっての計算ドリルは、はたして有益か — 『北星余市高校20周年誌』より

全国の高校の教師集団もまた、高校生の基礎学力の不足を憂え、基礎学力養成にとりくんでいる。以下、紹介する2つの高校に共通している考え方は、従来の

ような基礎学力だけをとりだして小・中に戻してドリルする方法をとらずに、高校生にふさわしい方法で実践している点である。私が、今回、ゼミ生とともにとりくんできた考え方も、この2校と基本点において一致しているように思われる。

その一つが北星余市高校である。「北の大地に灯かかげて」—北星余市高校の20年—の中に、6年間にわたる共同研究を総括して、「北大の高村泰雄先生のまとめから触れておきたい…略…基礎学力の形成は、高校教育の基本的な課題であるが、問題はどのような観点でとりくむかということである。」^⑧と指摘。これまでのとりくみと『基礎学力』のとらえかたを厳しく指摘している。

この指摘は非常に重要な部分である。「これまで行われてきた『基礎学力の回復』の試みはどのようなものであったろうか。たとえば、分数計算ができないといえ、もとの年齢、学年段階にもどった形で教える、高校で、小学校3年・4年の分数計算を、教科書で展開されたとおりに教える、英語でも中学校の教科書で教える、あるいは徹底したドリル、反復練習で習熟をはかることによって基礎学力を回復させる、といったことが考えられ、あるいは実践されてきた。」^⑨と、従来の実践を紹介した後、この種の実践の問題点を指摘している。

「これらは一見、生徒たちにとって有益なものに見える。しかし、基礎学力を、そのような形において系統的に積みあがっているものの基礎とみる学力観は大きな問題を含んでいる。同時に、高校段階で、小学校または中学校の内容・指導方法で教育することの、非教育性も当然問題となろう。いずれにしても、高校生には高校生にふさわしい基礎学力の内容・方法をもって、その形成をはかる必要があると考えるべきであろう。」^⑩と述べている。

3. “学力回復を実現しながら、6ヶ月で微分学習に到達できる” — 増島の考え方

今一つの高校の実践として自由の森学園高校・和光学園高校教師である増島の考え方について紹介する。『数学』（増島高敬編著、明石書店）である。この書籍でも、基礎学力にたちむかう教師の基本姿勢—三つの対応とその特徴と題して、増島がまとめている。彼によれば、低学力問題に対応するいろいろなやり方を比較検討して、「私（増島）の提起する実践」の特徴を

明らかにしている。

第一の対応 = “選別”は「文部省型の対応です。つまり、“90%の進学率になると能力の低い生徒も入学してくる。したがって能力に応じて学級編成を別にして教育しよう。数学が得意でない生徒は、数学の学習内容を切り下げて学習させてもよい”と考えます。その特徴は、低学力の原因が生徒の側にあるという判断です。したがって低学力の生徒は“それなりの教育を”というニュアンスが感じられ、つまずきを取り除いて学力の大きな飛躍をめざすという発想はありません。」^⑪

第二の対応 = “復習ドリル”は「低学力の生徒に何とかして学力回復をさせようと苦勞する先生がいます。けれども、高校教師としてはじめての経験ですから、効果的な方法について工夫が十分ではありません。小学校・中学校の教科書を手に入れて、その復習をするという対応の仕方になります。当然のように、やはり到達度別にわけて授業するしかない、という判断が生まれてきます。ただし、このように到達度別の編成をとる場合のねらいとしては、できるだけ早く学力回復をさせて、標準の学級編成にかえすことをねらっていますが、実際はなかなかうまくいかないようです。」^⑫

第三の対応 = “学力回復と高校数学の融合”の項では「“学力回復を実現しながら、6ヶ月で微分学習に到達できる”という私の実践を支えるものです。それは大きくまとめると二つの特徴をもっています。

まず、第一に、復習やドリルをいう考えを排除して“高校生にふさわしい方法で学習する”という着想をもっています。…略…第二の特徴は、学力回復だけを切りはなして扱ってはいけません。私はこれを“学力回復を高校内容の融合”と呼んでいます。これは学力欠落の部分があっても、可能なかぎり迂回路をたどりながら高校内容の学習をすすめることができるのです。そして、一年間の学習の流れの中の最も適切な箇所、必要な学力内容を能率的に回復していきます。」^⑬と述べている。

大変引用が長くなったが、この二つの高校の実践の教訓は、もとの年齢にもどって、基礎学力の養成にとりくむのではなく、高校の教育課題のなかで、高校生にふさわしい内容と方法で、とりくむことの大切さを述べている点である。

三.“研究論文をつくろう”を通して、見えてきた学生の変化

1. 論文を書く過程で、基礎学力を

今回のゼミでのとりくみの目標は、論文をつくりあげる過程で、知的好奇心を喚起する、自分の苦手な分野の改善につながることであった。それに加えて、研究論文を仕上げる過程で、学生の「基礎学力」にかかわるペーパーテストでは図れない「実態」を把握できるのではないかということであった。まさに、本稿のテーマである「ゼミ学生とともに考える基礎学力」にとりくむことによって、短大生にふさわしい方法（論文を仕上げる）で、基礎学力の養成に接近できればと期待しているのである。

ゼミ生が論文を書くことを目標とし、その過程で基礎学力の課題にも関心をもってもらえれば、自ずと基礎学力形成にもつながる。また、この過程をとおして、学生の生の学力実態を把握できれば言うことはない。

いいかえれば、「自らの基礎学力を考える」ことを論文のテーマとして、自らの基礎学力の弱点部分を意識させるように意図をもってとりくむ。そのことによって、直接、基礎学力の向上という目標に届かなくても、自らの学力問題への関心と学習意欲につながるのであれば、それはそれで上々である。

本学は、学生に対して、次のような“よびかけ”を行っている。それは、「大学での学習は、自主的な自立的な学習が基本です。学生は、自らの得意なところを伸ばしたり、弱点を克服する努力を自主的におこなわなければなりません。本当に力を付けたいと思ったら、積極的にゼミ指導教員や教科担当教員に指導を仰いでください。」となっている。

さて、私はゼミ演習にだされている課題の克服と上記の学生への“よびかけ”から、本学の教育目標を一つでも前進させるべく、基礎ゼミの計画をたてた。ゼミ学生には総合演習の着地点は研究論文を作成することを確認した上で、ゼミをスタートさせた。以下は、その後の14回のゼミのとりくみの概要である。

総合演習（ゼミ）は、毎週一回であるが、実際やってみると、意外に時間がないものである。しかもやってみて分かったことであるが、時間の足りなかった原因には3つの理由があった。

一つは後で述べるが、ゼミ運営の仕方があまりにも過密に過ぎて論文研究の時間を保障できなかったこと。二つ目は、テーマが基礎学力の不足という自らの

弱点に焦点を当てた内容であるため、どこまで進めるかも定かでなく、見通しが立たなかったこと。三つ目は過密な学内行事に追われたことだ。前期でいえば、2泊3日の宿泊訓練があり、実習とその発表会などだ。その上、9月に入って、中間発表の前は前期テストの期間があり、学生は小論文を整理しまとめる時間的余裕は殆どなかったといえる。

2. 具体的なとりくみを通して見えた、学生の実態

前述したゼミ運営の時間の問題だが、90分のゼミの時間配分も研究論文を作るための時間配分にはなっていない。それは、本学学生の課題をすこしでも克服するために、配慮して運営したつもりであった。

総合演習の時間90分を毎回、前半・後半45分ずつに分けた。前半45分をポジティブタイム（「一週間を振り返って」=以下Pタイム）として、一週間を振り返る時間にした。後半45分をベイシック・スコラシップタイム（基礎学力=Bタイム）として基礎学力の養成をテーマとした論文作成の時間に使った。Pタイムは直接本稿のテーマと関係ないので、詳しくは述べないが、学生の基礎学力の実態を知る上で一つの参考になるのではないかと考え、その一部を報告する。

「一週間を振り返って」を話題に、司会、記録、準備係を決め、毎週順番に交代する様にした。全員が自分の一週間を振り返ってコメントを述べ、それぞれ全員がノートにメモするという形式をとった。一人のコメント時間は1分間とした。そして、その日の記録係が私の方はパソコンにメールを送ってくる方法をとった。私はパソコンだが、学生は携帯電話からであったからうまくいくだろうかとは思った。「人の話を聞いてメモ取る練習」と考えた。また、記録係は、全員のコメントをまとめて送信する。前期、学生の記録係が一周するまで、11週間は続けた。その後は、Pタイムでは、一分間コメントの時間を短縮するため、各自の携帯電話から、メールによる200字コメントに切り替えた。それをまとめて、次にゼミ会議で配布するようにした。

毎回の「一週間を振り返って」は何とか続けることができた。司会・準備係もそれなりに続けられていた。しかし、その一方で、学生の実態を示すものとして記載すると、①1分間コメントは、井戸端会議のように雑談になってしまう傾向がしばしば起こった。コメン

トのための準備をしないのである。②メモをノートにとるのはいいのだが、学生の中には、発言の最中で「ちょっと待って、ノートがとれないから」と、何度も聞き直しをするために、意外に時間をとってしまう結果になった。これではメモの意味が薄れてしまうというものだ。

したがって、当初予定していたPタイムとBタイムの時間、45分ずつは、前半で大幅に食い込み大きな誤算だった。

3. 森下ゼミ「卒論—中間発表」報告資料の完成までのとりくみ

さて、本題のBタイムについてだが、後述のゼミ別中間発表のために作成した「森下ゼミ“卒論—中間発表”」の報告集<文末尾の「報告資料集」>を見ていただきたい。これが今回のテーマについての到達点である。

Bタイムはどのように進めたかについて若干ふれる。

- 1回目 自己紹介と写真撮影などゼミのガイダンス
- 2回目 「①二つの基礎・教養力をどこから始めるか②自分の計画をたてる」について話し合う。
- 3回目 前期ゼミの目標を提示。「レポート・卒論と実習に必要な実力をどう計画的に身につければいいか」について話し合う。
- 4回目 自分の論文&レポートの前期・計画<目標>を意識。『必読書—大学生のためのレポート・論文術』小笠原喜康著（講談社現代新書）を紹介し、全員が購入することとなった。基礎学力については、それぞれ自分の苦手な分野について出し合い、研究テーマを設定することとした。4つのグループに分かれた。①日本語（ひらがな）②漢字③話す（敬語・ていねい語）④論文・作文の4つの分野であった。そして、7月末までの計画を立てることにした。<「報告資料集」P1>
- 5回目 研究論文の「目標」を確認「1. 最小限度の基礎問題を作成する。2. 作成問題を他の学生に実験する。3. 結果を分析する。」とした。
- 6回目 論文作成には記録を残すこと—USBメモリー（以下、USB）を利用し、作業した内容を蓄積することを確認。しかし、問題は、

学生がUSBを携帯から、森下にするすべがないことである。図書館で調べて得た資料を学生のUSBに保存した後、USBを研究室に来て入力しなくてはならない不便さである。ある学生はインターネット・カフェで入力した資料を送信してくるような努力をしていた。

「①研究グループメンバーの氏名 ②研究テーマ ③テーマ設定の理由 仕事の分担(資料の集め方)」など、グループ研究の計画をUSBに入れるように、確認した。

- 7回目 “卒論を成功させる「4つの確かめ」」を提案した。①今やっていることが、実習と卒論など自分の役に立つよう考えているか？ ②計画を立て、見通しをもって仕事をしているか？ ③フラッシュ・メモリーに、研究データの蓄積ができていないか？ ④自分のまとめた研究が人のために役立つか自問しているか？ <「報告資料集」P1>

8回目～12回

中間発表に形式だけでも間に合わせなければと焦ったが、学生の方はまったく焦る様子は見られなかった。ゼミ内での発表(14回目)の準備も、なかなか進展せずじまいであった。理由は、実習記録のまとめや実習発表の準備などで集中できなかったせいも大きかった。

- 14回目 やっと中間発表の形式を理解。9月にはいつてからはテスト期間で、ゼミ別発表についても気が入らない状態であった。

- 15回目 ゼミ別中間発表会。8つのゼミのトップバッターをつとめた。<「報告資料集」P2-9>

全く、綱渡りのようなとりくみであった。学生とは1週間に1度会うだけだ。この間に麻疹の抗体検査の確認や個人面談など臨時の事態がつぎつぎに起こっていたように思う。それでなくても学生は忙しそうにしていた。放課後になると、バイトにすぐにでかけてしまう学生も多く、なかなか一つのことを議論できる状態ではなかった。だから、ほとんどはメールによる交信のみで学生から返信がなければそれっきりということになった。また、学生によってはアドレスが変わ

るのでそれも大変なことの一つであった。9月19日のゼミ別発表会に報告資料を間に合わせるのがやっとであった。でも、これが森下ゼミの当初からの中心目標であったから、よくやったといえる結果だ。とにかく、この論文を仕上げる過程で、学生の基礎学力の力をどう育て、どんな実態を把握できるかが当初のねらいであったはずである。その点でいえば、基礎データも十分揃えられなかったというのが正直な結果である。今回のとりくみは真正面から基礎学力の問題を取り上げた点で、評価できる。しかし、いささか学生の興味、関心という点では盛り上がりには欠けた理由かもしれない。この課題を自らのものとして主体的にとりくんだ学生にとってはそれなりの手ごたえを感じたと思うが、まだまだ全体のものには至っていない。これは今後課題である。以下、総括するには十分な分析をする時間的余裕がないため、思いつくまま、顕著なもののみ列挙すると、

- (1) 「森下ゼミ “卒論—中間発表”」報告資料集の質を問われると、大変不十分なものであると言わざるをえない。しかし、当初、半年で論文らしきものを文書として仕上げるという目標には、近づけたと考える。
- (2) 論文とはどんなもののかの入門程度は認識させることができた。
- (3) 総合的には学問の「入り口」程度は感じてもらえた。その点では学力養成にもそれなりに影響があったのではないか。
- (4) USBメモリーの活用が論文との関係で上手く利用できた。
- (5) 夏休みの宿題にしてあった「必読書—大学生のためのレポート・論文術」の読後レポート(800字以内)を全員期限内に提出した。立派なものだった。<「報告資料集」P9>
- (6) ゼミの時間が、なかなか集団としての話し合いになりにくい。実習の関連などあまりにも過密スケジュールのため十分な意見交換ができなかった。問題点の一つである。
- (7) 意外だったのは、ゼミ学生どおしの関係よりも、どちらかというクラス単位の方が集団意識は強いようであった。
- (8) グループごとに間違いやすい問題を見つけ、資料に掲載するという方法は、学生の意欲を引き出す点ではよかったようである。今後、研究を推進

していく上で、有効な方法であった。

- (9) 今回の取り組みの中で明らかになったことは、学生がやる気になるかどうかによって、大学生といえども、驚くほど積極的、自発的に課題にとりくんでいた学生がでてきたことである。

おわりに

基礎学力の低下問題は、今や本学だけの問題ではなく、日本の小学校から大学までの問題となっている。また、学力問題は日本だけに留まらず、世界的にも関心の高いところである。フィンランドの子ども達の「学力」がなぜ高いかが研究の対象となっている。その中で、私が注目した点は「94年改革」以来、この10年ほどのフィンランドの総合学校における基礎教育を軸とする教育改革の基調が、「すべての子どもの必要に応じること」「教えることから学ぶことへ」「国家の規制の縮減、地域・学校の権限の拡大、生徒・父母・教師の参加へ」となっていることである。日本政府による上からの「教育改革」とは随分違うものである。

冒頭にも述べたように、基礎学力の養成は本学教員全体の課題である。私は、本稿の研究のテーマである「基礎学力の養成」がどれだけ大きく、個人の能力では手に負えない課題であることは十分承知しているつもりである。

だからこそ、本学における基礎学力の養成についても、決して近視眼的にならず、“視野は広く、とりくみは足下から”を合言葉に、継続して研究と実践を続けたいと願うものである。

「一、基礎学力をひとり切り離しての議論や実践ではダメ」では、そもそも「基礎学力」とはなにかを明らかにしたつもりである。また「二、基礎学力養成は、短大生にふさわしい課題と結びつけて」では、「一、基礎学力論」の上に、二つの高校での実践例から、国家の無責任な教育政策を乗り越えて基礎学力の養成にとりくんだ教師たちの子ども観・教育観を紹介したつもりである。そして、「三、研究論文をつくろうを通して、見えてきた学生の変化」として、基礎学力を実習や卒論に必要な力として位置づけた。具体的にはゼミ生とともに、「基礎学力」をテーマに論文を書くことを通して、見えてきた学生の変化や実態を紹介しよう心掛けた。PタイムやBタイムを通じて学力の基礎を培っていくために悪戦苦闘しながら試行錯誤のと

りくみであった。

本研究はまさに、緒に就いたばかりのものである。理論的にも実践的にも研究に値するかどうかは、はなはだ疑問である。しかし、先行してとりくんだことによって、今後の学内での議論と実践の交流がひろがれば、と願っているところである。

今後の課題は、学生の興味と関心をどうとらえ、指導教員の専門分野と結びつけながら、一つでも多くの素晴らしい研究が発表されること、一人でも多くの学生が学問に開眼すること、そんな実践をつくりだすことではないだろうか。そのことがとりもなおさず、本学の基礎学力の養成という大きな課題の克服につながるものと確信するものである。

(もりした ひろし 本学准教授)

【注】

- ① 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『算数のできない大学生』、東洋経済新聞社、東洋経済新聞社2001、P P i - iii
- ② 『2007年度「学生便覧」』、大阪健康福祉短期大学、PP16-17
- ③ 坂元忠芳『子どもと学力』、新日本新書、1989、P P 14 - 15
- ④ 前掲書、P .150、
- ⑤ 矢川徳光『教育とはなにか』新日本新書、1981、P .110 - 111
- ⑥ 坂元忠芳、前掲書、p.154
- ⑦ 前掲書、p.158
- ⑧ 北星余市高等学校『第11章（終章）明日への展望を求めて 北の大地に灯かかげて - 北星余市高校の20年 - 北星余市高等学校』、株式会社須田製版、1987、P413
- ⑨ 前掲書、P414
- ⑩ 前掲書、P414
- ⑪ 増島高敬編著『数学』、明石書店、2006、P161
- ⑫ 前掲書、P162
- ⑬ 前掲書、P162

【参考文献】

岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄『分数のできない大学生』、
東洋経済新聞社、1999

A Study Conducted with the Students in the Seminar Concerning How to Cultivate Basic Learning Ability

Hiroshi Morishita

Summary

Osaka College of Social Health and Welfare was founded in 2002, and opened its Department of Childhood Welfare in 2006. Now it is called into question what kind of knowledge and skills the students need to acquire during the 2-year course in the college, in order for them to be a full-fledged child care worker. What is certain is that it's indispensable to cultivate basic learning ability which makes the students up to the lectures on their specialized subject and their practical training. However, when it comes to specific matters such as what defines basic learning ability, and how to let the students acquire it, the task seems quite difficult and intractable.

At the discussions of the department, we came to a conclusion that it would take at least 2 or 3 years to get certain prospects concerning this task. Based on the conclusion at the department, we confirmed that for over the six months starting from this April, 2007, we would intentionally tackle the issue of cultivating basic learning ability through each of our seminars, with due considerations to the discipline of each of the tutoring professors, as well as to the inclinations and interests of the students. In my seminar I've tackled this issue, making the acquisition of basic learning ability a top priority, and at the final stage of the seminar, letting the students finish writing the graduation theses. The students finished their writings in the form of research paper, although sometimes inadequate, in time for the interim presentations in September, 2007. Therefore, although I fully acknowledge that this study is not complete in terms of substance, I hope you to read this paper as one of the precedential studies now being conducted in the college concerning how to cultivate basic learning ability.

Keywords : basic learning ability, right to learn, intellectual curiosity, educational reform

*Osaka College of Social Health and Welfare
〒590-0014 8-2 Tadei-cho, Sakai-ku, Sakai City, Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Care and Welfare
e-mail: h.morishita@kenko-fukushi.ac.jp